Osaka University Knowledge Archive

Title	上博楚簡『舉治王天下』の古聖王伝承
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 43-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58659
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　號号（総五十六号）平成二十五年六月　四三―六四頁

〔特集二〕

上博楚簡『舉治王天下』の古聖王伝承

湯浅邦弘

序言

二〇一三年初頭、『上海博物館蔵戦国楚竹書（九）』（馬承源主編、上海古籍出版社）が刊行された。奥付は「二〇一二年十二月」となっているが、実際に中国で刊行されたのは二〇一三年一月であり、日本に輸入され始めたのは、同年二月以降であった。

この第九分冊には、七つの文献が収録されているが、その内、『舉治王天下』と称する文献には、堯舜などの古聖王の伝承が記述されている。特に興味深いのは、具体的な君臣問答であり、従来の神話・伝承には見られなかったものもある。堯舜禹は、儒家や墨家において絶賛される古聖王でありながら、その伝承の詳細については不明な点が多い。

そこで、ここでは、『舉治王天下』全五篇の内、堯舜禹の伝承が見られる三篇に注目し、その釈読を行った上で、従来の伝世文献や他の新出土文献における伝承と比較して、古聖王伝承における本文献の特質と意義について考察を加えることとする。

一、『舉治王天下』の概要

まず初めに、『上海博物館蔵戦国楚竹書（九）』の図版や釈文考釈を参考にして、『舉治王天下』の概要を以下に箇条書きでまとめておきたい。

・原釈文担当者は濮茅左氏。

・本巻はもともと泥塊の中に保存されていたが、流伝の過程で残欠が生じた。
・計五篇の文章が連続して筆写されており、篇と篇との間は墨節によって区切られている。
・「古公見太公望」篇、「文王訪之於尚父舉治」篇は、古公亶父（周の文王の祖父）・文王と尚父（太公望呂尚）の「舉治」（統治の方法に関する）問答を記載している。
・「堯王天下」篇、「舜王天下」篇、「禹王天下」篇は堯・舜・禹が提起した治国・治民に関する議題を記載している。
・全三十五簡。七二八字。完簡は五枚（五簡、六簡、八簡、九簡、三十簡）。
・簡長は四十六センチ、幅は六ミリ、厚さは一二ミリ程度。
・上下の簡端は平頭。右契口。三道編綫。
・上端から第一契口までは一・四センチ。第一契口から第二契口までは二十二・三～二十二・五センチ。第二契口から第三契口までは二十・三～二十・五センチ。第三契口から下端までは一・五センチ。
・文字は竹黄面に記され、竹青面には文字はない。
・前二篇の完簡の文字数は、一簡あたり二十七～三十三字程度。後三篇の完簡の文字数は、一簡あたり三十九字程度。
・篇題の記載はなく、「舉治王天下」および各篇の名称は、内容に基づいて整理者が付した仮称である。

注意を要するのは、この五篇の配列とまとまりである。歴史の順番から言えば、堯・舜・禹・古公・文王となるはずであるが、この五篇の配列に従うと、古公・文王・堯・舜・禹となってしまう。また、「古公見太公望」篇の竹簡残欠が大きいため、明確なことは言えないが、前二篇の完簡の文字数が一簡あたり二十七～三十三字程度であるのに対して、後三篇の完簡の文字数は一簡あたり三十九字程度と、書きぶりにもやや相違がある。更に、篇と篇とを区切る墨節があると説明されているが、墨節を確認できるのは、「堯王天下」篇の前と「禹王天下」篇の前の二箇所のみである。

従って、『舉治王天下』は、筆写元のテキストが、そもそもこの五篇で完結し、かつこのような配列になっていたかどうかについては疑問も残る。あるいは筆写者が二つ以上の筆写元から、何らかの意図のもとに、このような抄写を行ったとの可能性も考えられる。とすれば、前二篇を意識した「舉治」の語と、後三篇に見える「王

天下」の語とを接合させた「舉治王天下」という篇題（仮称）についても、やや疑問が残るとしなければならない。

しかし、これら五篇は、いずれも君臣問答であること、王政に関する内容であること、などの共通点もあり、現時点で、『舉治王天下』としてまとめられていることについては、一定の評価が与えられよう。また、五篇の内容には、後述のように、それほど強い連続性は認められず、一篇一篇を個別に検討することは充分に可能であると思われる。但し、「文王訪之於尚父舉治」篇については、鄔可晶「《上博（九）・舉治王天下》「文王訪之於尚父舉治」篇編連小議」（簡帛網・武漢大学簡帛研究中心、二〇一三年一月十一日）が上博楚簡『成王既邦』との編聯について意見を提出しており、今後慎重な取り扱いが必要となる。

二、「堯王天下」「舜王天下」「禹王天下」釈読

それでは、以下に「堯王天下」「舜王天下」「禹王天下」三篇の釈読（原文・書き下し文）を提示したい。【 】内の番号は、原釈文に付された竹簡番号。「■」は墨釘、「▬」は重文、「▬」は墨節の記号である。

「堯王天下」

【21】■堯王天下備方■。恒吝長明、行四……【22】訪之於子曰、「従政何先」。禹答曰、「惟志■。」堯……【23】則物生、犢則知成。金厚不流、玉則不戡。堯以四害之紊爲未也、乃問於禹曰、「大害既制、小……【24】居時何先」。曰、「毋忘其所不能」。堯曰、「嗚呼、日月閟間、歳聿□……【25】譏之於堯▬（堯、堯）始用之嘉德……

堯　天下に王たりて方を備す。恒に長明たらんことを吝み、行四……之を子に訪いて曰く、「従政は何をか先にせん」。禹答えて曰く、「惟だ志なり」。堯……則物生、犢則知成。金厚不流、玉則不戡。堯　四害の紊を以て未だ為さざるなり。乃ち禹に問いて曰く、「大害既に制す。小……居る時何をか先にせん」。曰く、「其の能わざる所を忘るる毋かれ」。堯曰く、「嗚呼、日月閟間、歳聿□……譏之於堯▬（堯、堯）始用之嘉德……

この篇は、「天下に王」となり四方を平定した堯が、その持続について懸念を抱き、「子」（禹）を訪れて下問するという内容である。堯は、まず「従政」の際に優先すべきものは何かと問う。これに対して禹は「志」を大

切にせよと答える。その後の文章は、竹簡の残欠もあり、少し読み取りにくいが、再び堯と禹との問答が始まる。次の堯の質問は、「平居」の際（平常時）、優先すべきものは何かというものである。禹は、自分の不得意なこと（これまでうまくできなかったこと）を忘れるなと答えている。

ここで注目されるのは、何より堯と禹とが直接問答している点である。下記の「禹王天下」篇でも、禹は直接堯に仕え、答申したとされており、この点は、『舉治王天下』に共通する特色だと言える。

「舜王天下」

【26】舜王天下■、三苗不賓、舜不割其道、不擯其……【27】……曰、「齊政固在嫩、請……【28】……失也。怨并之衆人也、非能合德於世者也。……【29】明則保國、知賢政治■、教美民服■。

舜　天下に王たり、三苗賓（したが）わず、舜　其の道を割（害）せず、其の……を擯（す）てず、……曰く、「政を斉うるは固より美（謀）に在り、請う……失也。怨并之衆人也、能く徳を世に合する者に非ざるなり。……明なれば則ち国を保ち、賢を知れば政治まり、美を教うれば民服す。

この篇は、竹簡の残欠が大きく、君臣問答であったのか否か、判然としない。ただ、舜が「天下に王」となった際の記述であることは分かる。そして、服従しない「三苗」に対して、舜が「其の道を割（害）せず」と温和な対応を取っていることも分かる。武力ではなく、徳によって三苗を服従させようとした点については、伝世文献、例えば、『書経』大禹謨や『韓非子』五蠹篇にも記述があることから、舜の伝承として著名なものであったことが分かる。

但し、舜の三苗（有苗）討伐は、堯の時代だったとするもの、あるいは禹によるものだったとするものもあり（注1）、伝承にやや揺れも見られる。

「禹王天下」

【29】■禹王天下、服深恒厚……【30】五年而天下正。一曰、禹事堯、天下大水。堯乃就禹曰、「乞汝其往、疏川起谷、以瀆天下」。禹疏江爲三、疏河【31】爲九、百川皆導、塞敷卆〓（九十）、夬瀆三百、百糾置身鯰鰭、禹使民以二和、民乃盡力■、百川既【32】導、天下能恒。二曰、禹奉舜重德、施于四國、誨以勞民、畿而盡力。禹奮中疾志、有欲而弗【33】違、深陟固疏、有功而弗廢■。三曰、禹王天下昭、大志不私……【34】棄身■、生行勞

民■、死行不祭■、前行建功、中行固同、終行不［窮］……【35】五曰、恕而不寡、不愛其……

禹 天下に王たり、服すること深く恒なること厚し。……五年にして天下正し。一に曰く、禹 堯に事うるに、天下大水あり。堯乃ち禹に就きて曰く、「乞う汝其れ往きて、川を疏し谷を起し、以て天下に瀆せ」。禹 江を疏すこと三為り、河を疏すこと九為り、百川皆導き、塞もて敷くこと九十、瀆を決すること三百、百たび糾して身を鯀鯖に置く。禹 民を使うに二和を以てし、民乃ち力を尽くす。百川既に導かれ、天下能く恒あり。二に曰く、禹 舜を奉じて徳を重んじ、四国に施し、誨えて以て民を労わり、幾にありて力を尽くす。禹 中を奮げ志を疾くし、欲すること有るも違わず、深く陟りて固く疏し、功有りて廃せず。三に曰く、禹 王たりて天下昭かに、大志（之を大にして）私せず……身を棄て、生行して民を労り、死行して祭らず、前行して功を建て、中行して固く同じ、終行して窮まらず……五曰、恕而不寡、不愛其……

この篇では、まず、禹が「天下に王」となり、治世五年で天下が正しくなったとされる(注2)。そして、その経緯を五点説明している。

第一は、禹の治水事業である。これは、堯の統治下で、堯の指令によって行われた事業だとされている。禹が堯に仕えていた時に大洪水があり、堯は、禹に対して、現地に赴き、川と谷を疎通させ、天下に貫通させよと命じた。禹はそれを実行し、また民も禹のために力を尽くし、すべての川が開通して、天下は平定されたという。

第二は、舜の臣下として尽力した点である。但し、舜と禹との具体的な問答は記されていない。

第三は、禹自身が王となり、天下が明らかになったことである。なお、竹簡残欠でこの後にあるはずの「四に曰く」の部分は未詳であり、「五に曰く」も冒頭部しか残されておらず詳細は分からない。

この篇で注目されるのは、禹の治水伝承である。やはり禹は治水によって功績をあげた人物として描かれている。但し、伝世文献における禹の治水伝承とはやや異なっている。まず、この治水事業は、舜ではなく堯の指令によって行われたとされている。また、堯の時、洪水を治めたとされる共工や、禹の父で治水に失敗し舜に殺されたとされる鯀は登場していない。堯の時代の洪水を堯の直接の下命によって禹が治めたとされているのであ

る。また、先の「堯王天下」篇と同じく、ここでも、堯と禹とが直接問答しており、舜は登場していない。

ただ、この点については、竹簡の誤配列という可能性はないであろうか。竹簡の接続を誤ったために、あたかも堯と禹とが会話しているように見える、との可能性についても検討しておかなければならない。そこでまず、「堯王天下」篇を確認してみよう。

【22】訪之於子曰、「從政何先」。禹答曰、「惟志■。」堯……

このように、第二十二簡冒頭に、「之を子に訪いて曰く、「從政は何をか先にせん」」とあり、この「子」が誰であったのかは、直ちには分からない。しかし、その直後、「禹答えて曰く、「惟だ志なり」。堯……」と続くので、この「子」は禹のことであり、堯と禹との問答であることに疑いの余地はない。同一竹簡に筆写されているのであるから、竹簡の誤配列による読み間違いという可能性は考えられない。

次に「禹王天下」篇は次のようになっている。

【30】五年而天下正。一曰、禹事堯、天下大水。堯乃就禹曰、「乞汝其往、疏川起谷、以瀆天下」。禹疏江爲三、疏河

この第三十簡は、完簡であり、そもそも接続の誤りといった問題は生じ得ない。しかもここでは、「禹 堯に事うるに、天下大水あり。堯乃ち禹に就きて曰く」と、明らかに堯と禹とが君臣関係に置かれ、直接問答しているのである。先の「堯王天下」篇と同様、やはりこの点が、『舉治王天下』の大きな特色であると言えよう。

なお、『舉治王天下』の成立年代や地域性をうかがい得る直接的な材料は見られないが、年代に関しては、周知の通り、上博楚簡の炭素測定の数値が参考となる。二二五七±六五年前という中国科学院上海原子核研究所の測定値が紹介されており、一九五〇年を定点とする国際基準に従えば、前三〇八±六五年、すなわち前三七三年から前二四三年。下限は秦の将軍白起が郢を占領した前二七八年の可能性が高いことから、書写年代は前三七三年から前二七八年の間と推定される。

一方、地域性については、これまで公開された上博楚簡の中には明らかに楚の現地性のものと考えられる文献と、中原で成立したと推測されるものなどがあるが、本文献については、確定的な手がかりはない。但し、楚の地域性を特にうかがわせる材料はなく、消極的な理由ではあるが、中原の成立という可能性を考慮しておきたい。

三、伝世文献における古聖王伝承

さて、それでは、右のような『舉治王天下』の古聖王伝承は、伝世文献に記された伝承とどのような関係にあると言えるのだろうか。

そこでまず、禹の治水事業について確認してみよう。太古の治水伝承として最も著名なのは、堯の時代の大洪水に際して、堯が鯀（禹の父）に命じたが、鯀が治水に失敗した、そこで次に舜が禹に命じて治水を成功させた、というものである。『書経』堯典、舜典、禹貢、大禹謨（偽古文）、『史記』五帝本紀、夏本紀、『大戴礼記』五帝徳篇、『山海経』海内経等に記載される伝承である。念のため、『書経』の記載を二つあげておく。

帝曰く、「咨四岳、湯湯たる洪水は方く割す。蕩蕩として山を懐み陵に襄り、浩浩として天を滔し、下民は其れ咨う。有か能く俾乂する」。僉曰く、「於、鯀なるかな」。帝曰く、「吁、咈えるかな。命に方き族を圮る」。岳曰く、「异なるかな。可を試みるを乃ち已むるは」。帝曰く、「往いに欽まんかな」。九載績用成らず。（『書経』堯典）

誰を治水に当たらせたら良いかとの堯の下問に、みなは「鯀」を推薦した。そこで鯀に治水を命じたが、九年たっても実績はあがらなかった、という。

舜曰く、「咨四岳。能く庸を奮って帝の載を熙すもの有らば、百揆に宅き采を亮けしめん。恵れ疇ぞ」。僉曰く、「伯禹を司空と作せ」。帝曰く、「俞り。咨禹。汝は水土を平ぐるを、惟れ時れ懋めんかな」。（『書経』舜典）

次に、堯から禅譲を受けた舜の時代となり、舜が補佐役を求めたところ、皆は禹を推薦し、舜は禹を司空に任命し、治水事業に当たらせることにした、という。

このように、『書経』では、堯の時代の治水は、鯀が行ったが失敗し、改めて舜の時代になって、舜の命を受けた禹が治水に成功した、との伝承になっている。

ところが、『孟子』では、この治水伝承にやや揺らぎが見られる。まず、滕文公上篇の伝承を引用してみよう。

堯の時に当たり、天下猶未だ平らかならず。洪水横流し、天下に氾濫す。草木暢茂し、禽獣繁殖し、五穀登らず、禽獣人に偪り、獣蹄鳥跡の道、中国に交わる。堯独り之を憂え、舜を挙げて治を敷かしむ。舜 益をして火を掌らしめ、益 山沢を烈して之を焚き、禽獣逃れ匿る。禹九河を疏し、済・漯を瀹して、諸を海に注ぎ、汝・漢を決し、淮・泗を排し

て、之を江に注ぎ、然る後に中国得て食うべきなり。是の時に当たりてや、禹外に八年、三たび其の門を過ぎて而も入らず、耕さんと欲すと雖も、得んや。（『孟子』滕文公上篇）

堯の時代、天下はまだ乱れており、洪水もあった。それを憂えた堯は舜を登用して、治世に当たらせた。舜は禹に命じて治水事業を行わせた。禹は八年間治水に専念したという。ここでは、堯―舜―禹という系譜は守られており、禹が治水に当たったのは、当時、堯の臣下であった舜の命によるとされている。ただ、この記述では、治水の実施が堯の治世であったのか、それとも舜が禅譲を受けてから後のことであったのか、判然としない。

そこで次に、同じく『孟子』の滕文公下篇の記述に注目してみよう。

堯の時に当たり、水逆行し、中国に氾濫す。蛇龍之に居り、民定むる所無し。下なる者は巣を為り、上なる者は営窟を為る。書に曰く、洚水余を警む、と。洚水とは、洪水なり。禹をして之を治めしむ。禹地を掘りて之を海に注ぎ、蛇龍を駆りて之を菹に放つ。水地中由り行く。江・淮・河・漢是れなり。（『孟子』滕文公下篇）

堯の時、大洪水が起こり、中国に氾濫した。そこで堯は禹に治水を命じ、禹は大地を掘削して洪水を治めた。その流れが今の江・淮・河・漢水である、という伝承である。ここには、鯀や舜が登場しない。治水は、堯の直接の下命により、禹が行ったとされているのである。これは、右の滕文公上篇の伝承を単に省略して記述したものと考えて良いのだろうか。それとも別系統の伝承が反映されていると考えられるのであろうか。

そこで、この問題を追究する前に、改めて、古聖王の系譜が伝世文献にどのように記載されているのか検討してみよう。結論を先に言えば、伝世文献においては、「堯舜」、「舜禹」、「堯舜禹」、「堯舜禹湯文武」、という系譜や組み合わせで語られることが圧倒的に多い。

中でも、最も多いのは「堯舜」の組み合わせである。まずは『論語』の例である。

子貢曰く、「如し博く民に施して能く衆を済う有らば、何如。仁と謂うべきか」。子曰く、「何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。堯舜も其れ猶諸を病めり」。（『論語』雍也篇）

子貢の問に対して、孔子は、「堯舜」を偉大な「聖」人として顕彰する（注3）。

また、堯曰篇では、堯―舜、舜―禹という君臣関係を前提とする伝承が見られる。

堯曰く、「咨爾舜。天の暦数は爾の躬に在り。允に其の中を執れ。四海困窮せば、天禄永く終えん」。舜も亦た以て禹に命ず。（『論語』堯曰篇）

この堯曰篇では、堯が舜に向かって訓示し、次に舜が禹に命じたとされていて、「堯―舜」、「舜―禹」という君臣関係が確認できる。

次に、『孟子』では、孟子が常に性善説を唱え、「堯舜」を顕彰していたとされる。

滕文公世子為りしとき、将に楚に之かんとし、宋を過りて孟子を見る。孟子性善を道い、言えば必ず堯舜を称す。（『孟子』滕文公上篇）

また、「堯―舜」、「舜―禹・皋陶」という君臣関係が示される。

堯は舜を得ざるを以て己が憂いと為し、舜は禹・皋陶を得ざるを以て己が憂いと為す。（『孟子』滕文公上篇）

更に、次の資料でも、「堯舜」が亡くなった後、天下は大いに乱れたとされており、「堯舜」が顕彰されていることが分かる。

堯舜既に没し、聖人の道衰う。暴君代（かわるがわる）作り、宮室を壊して以て**汚**池と為し、民安息する所無し。田を棄てて以て園囿と為し、民をして衣食するを得ざらしむ。邪説暴行又作る。園囿・**汚**地・沛沢多くして、禽獣至る。紂の身に及んで、天下又大いに乱る。（『孟子』滕文公下）

こうした聖王の顕彰は、『荀子』にも同様にうかがうことができる。

権は之を重くし、兵は之を勁（つよ）くし、名声は之を美にす。夫の堯舜なる者は天下を一にするも、是に毫末も加うる能わざるなり。（『荀子』王制篇）

ここでも、「堯舜」の顕彰が見られる。この王制篇では、「堯舜」を「天下を一」にした代表者として顕彰している。

禅譲に関する議論でも、次のように見える。

世俗の説を為す者曰く、「堯舜擅（禅）譲せり」。是れ然らず。天子なる者は、埶（勢）位至尊にして、天下に敵するなく、夫れ有た誰と与に譲らん。（『荀子』正論篇）

世俗の認識では、禅譲した王の代表者が「堯舜」であるとされるが、『荀子』はその通説を否定している。ただ、当時一般の認識として「堯舜」が顕彰されていたことは分かる。

次に、堯舜は人民を教化できなかったという俗説に対して、『荀子』はそれを否定する。彼らの子供の朱・象（しょう）

が感化されなかったというのは、堯舜の責任ではなく、朱・象が悪いのであるという。

世俗の説を為す者曰く、「堯舜は教化すること能わず」。是れ何ぞや。曰く、「朱・象すら化せざればなり」。是れ然らざるなり。堯舜は至って天下の善く教化する者なり。南面して天下を聴けば、生民の属は振動従服して以て之に化順せざるは莫し。（『荀子』正論篇）

性悪説に関しても、堯舜が君臣関係として登場する。

堯舜に問いて曰く、「人の情は何如」。舜対えて曰く、「人情は甚だ美からず、又何ぞ問わん」。（『荀子』性悪篇）

ここでは、堯が舜に対して、「人の情」について質問し、舜は「甚だ美からず」と回答している。性悪説を引き出すための故事である。

また、賢師良友を得ることの大切さを説き、その代表的な実践者として「堯舜禹湯」をあげる。

賢師を得て之に事うれば、則ち聞く所の者は堯舜禹湯の道なり。（『荀子』性悪篇）

こうした「堯舜」の組み合わせは、儒家系文献以外にも同様に確認することができる。以下に、『墨子』と『韓非子』の例をあげてみよう。

故に古者、堯は舜を服沢の陽に挙げて、之に政を授け、天下平らかなり。禹は益を陰方の中に挙げて、之に政を授け、九州成る。（『墨子』尚賢上篇）

まず『墨子』の用例であるが、ここでは、「堯―舜」、「禹―益」、という君臣関係が見られる。

次に、『韓非子』の用例である。

今国を以て車と為し、勢を以て馬と為し、号令を以て轡と為し、刑罰を以て鞭筴と為し、堯舜をして之を御せしむれば則ち天下治まり、桀紂之を御すれば則ち天下乱る。則ち賢不肖相去ること遠ければなり。（『韓非子』難勢篇）

この難勢篇では、権勢を操る主体が「堯舜」であれば天下は治まるが、「桀紂」であれば乱れると説く。

次の顕学篇では、儒墨がともに「堯舜」を顕彰したこと、またどちらが正統な学説か判別できないことを次のように指摘する。

孔子・墨子倶に堯舜を道いて、取舎同じからず、皆自ら真の堯舜と謂う。堯舜復たは生きず、将た誰にか儒・墨の誠を定めしめんや。（『韓非子』顕学篇）

また、忠孝篇にも次のように見える。

皆堯舜の道を以て是と為して之に法る。是を以て君を弑する有り、父に曲なる有り。堯舜湯武は、或

いは君臣の義に反し、後世の教えを乱る者なり。堯は人の君と為るも而して其の臣を君とし、舜は人の臣と為るも而して其の君を臣とし、湯武は人の臣と為るも而して其の主を**弑**し、其の尸を刑す。而るに天下之を誉(ほ)む。此れ天下の今に至るまで治まらざる所以の者なり。(『韓非子』忠孝篇)

天下は「孝悌忠順」の道を尊ぶがその実態を察して正しく実行した者はいないとして、「堯舜」および「湯武」の非道のさまを指摘する。否定的な文脈ではあるが、「堯舜」が偉大な聖王であったという世間の共通認識を確認することができる。

このように、古聖王の組み合わせとしては、「堯舜」が定番であるが、これに続いて、「舜禹」の組み合わせも多く見られる。

子曰く、「巍巍乎たり、舜禹の天下を有つや、与らず」。(『論語』泰伯篇)

まず右は、孔子が「舜禹」を顕彰する資料である。彼らは天下の経営に直接関与しなかった(自動的に治まった)として賞賛している。

同様に、『孟子』にも舜禹の組み合わせが見られる。

孟子曰く、「子路は人之に告ぐるに過ち有るを以てすれば則ち喜ぶ。禹は善言を聞けば則ち拝す。大舜は焉より大なる有り。善人と同じくし、己を舎てて人に従い、人に取りて以て善を為すを楽しむ。耕稼陶漁より以て帝と為るに至るまで、人に取るに非ざる者無し。諸を人に取りて以て善を為すは、是れ人と善を為す者なり。故に君子は人と善を為すより大なるは莫し」。(『孟子』公孫丑上篇)

ここでは、子路と禹を舜に比べ、人とともに善を為すという点で、舜を高く評価している。舜をより高く顕彰するものではあるが、禹も一定の評価を得ている。

舜禹の顕彰は、『荀子』にも次のように見える。

天下を一にし、万物を財(な)し、人民を長養し、天下を兼利し、通達の属は従い服さざること莫く、六説者も立ちどころに息め、十二子者も遷り化するは、則ち聖人の勢を得たる者にして、舜禹は是れなり。(『荀子』非十二子篇)

この非十二子篇では、「聖人の勢を得たる者」として「舜禹」を顕彰する。次も同じく「舜禹」を顕彰する文章である。

是くの如ければ、則ち舜禹も還(すなわ)ち至り、王業も還ち起こり、功は天下を壹にし、名は舜禹に配せん。(『荀子』王霸篇)

君主は親疎・貴賤を問わずに有能の人を求めるべきで

ある。そのようにすれば、臣下も職階を気にすることなく賢人に譲り、付き従うであろう。そうなれば舜禹(注4)といった聖人の功績も実現し、王者の業績も興起し、功績は天下を統一し、舜禹と並ぶ名声が得られるであろう、という内容である。聖王の代表として「舜禹」の名をあげている。

彊国篇にも、「舜禹」の組み合わせが見られる。力による政治は行き詰まり、徳による政治は行われる。秦は湯王・武王よりも威勢が強大であり、舜・禹よりも領土が広大であるが、数え切れないほどの憂患を抱えている、という『荀子』の主張である。

力術は止み、義術は行わるとは、曷の謂ぞや。曰く、秦の謂なり。湯武より威彊にして、舜禹より広大なるも、然れども憂患は勝げて校うべからざるなり。(『荀子』彊国篇)

次に、『韓非子』にも舜と禹の組み合わせが見られる。

昔者舜は吏をして鴻水を決せしめ、令に先んじて功有りて、舜は之を殺す。禹は諸侯を会稽の上に朝せしめ、防風の君後れ至りて、禹は之を斬る。(『韓非子』飾邪篇)

命令に先走った者、命令に遅れた者は厳正に処刑されるという主張であるが、ここに、舜と禹の処刑執行の故事があげられている。

次も同じく、舜と禹の組み合わせである。仁義は古代には役に立ったとして、舜・禹の故事をあげるが、今の時代には役に立たないとする。時代が変われば、する事も変わるという『韓非子』の主張である。

舜の時に当たり、有苗服せず、禹将に之を伐たんとす。舜曰く、「不可。上の徳厚からざるに、而も武を行うは、道に非ざるなり」と。乃ち教えを修むること三年、干戚を執りて舞い、有苗乃ち服す。(『韓非子』五蠹篇)

こうして、堯―舜、舜―禹という組み合わせは数多く見られるが、更に、「堯舜禹」「堯舜禹湯文武」という聖王の系譜が明記されるものもある。

舜 天下を禅りて之を禹に伝うるや、禹は祭器を作為す。墨く其の外を漆にして、朱く其の内を画き、縵帛を茵と為し、蔣席は頗縁し、觴酌に采(彩)有りて、樽俎に飾り有り。此れ彌々侈なり。而して国の服さざる者は三十三。(『韓非子』十過篇)

まず、『韓非子』の用例である。批判的な文脈であるが、ここには、堯、舜、禹という聖王の系譜が見られる。堯は質素倹約に努め、服さざる国はなかったが、堯が舜に天下を譲ると舜は食器に装飾を施し、ために諸侯

は贅沢になってきたと考えて、服従しない国が十三も出た。舜が天下を禹に譲ると、禹は新しく祭器を作り、益々贅沢になった。そこで服従しない国が三十三にも及んだという。堯、舜、禹の順に世界が劣化していったという主張である。

次は、『孟子』のいわゆる五百年周期説の中に見える聖人の系譜である。

孟子曰く、「堯舜由り湯に至るまで、五百有余歳。禹・皋陶の若きは、則ち見て之を知り、湯の若きは、則ち聞きて之を知る。湯由り文王に至るまで、五百有余歳。伊尹・萊朱の若きは則ち見て之を知り、文王の若きは、則ち聞きて之を知る。文王由り孔子に至るまで、五百有余歳。太公望・散宜生の若きは、則ち見て之を知り、孔子の若きは、則ち聞きて之を知る。孔子由り而来、今に至るまで、百有余歳。聖人の世を去ること、此くの若く其れ未だ遠からざるなり。聖人の居に近きこと、此くの若く其れ甚しきなり。然り而して有ること無しとすれば、則ち亦た有ること無からん」。（『孟子』尽心下篇）

ここでは、堯、舜、禹、湯、文、武、孔子という聖人の系譜とその時間的な間隔を説く(注5)。

『荀子』も同様の聖王の系譜を念頭に置き、「両帝四王」(注6)の軍事活動について次のような主張を展開する。

是を以て堯は驩兜を伐ち、舜は有苗を伐ち、禹は共工を伐ち、湯は有夏を伐ち、文王は崇を伐ち、武王は紂を伐つ。此の両帝四王は、皆仁義の兵を以て、天下に行うなり。（『荀子』議兵篇）

「仁義の兵」を天下に行った代表例として、堯、舜、禹、湯、文、武の挙兵をあげる。

一方、道家系の文献では、更に黄帝が加わり、黄帝、堯、舜、禹、湯、文、武という聖王の系譜が語られる。

世の高しとする所は、黄帝に若くは莫きも、黄帝すら尚お徳を全うする能わずして、涿鹿の野に戦い、流血百里なり。堯は不慈、舜は不孝、禹は偏枯、湯は其の主を放ち、武王は紂を伐ち、文王は羑里に拘わる。此の六子は、世の高しとする所なり。之を孰論するに、皆利を以て其の真を惑わして、強いて其の情性に反く。其の行乃ち甚だ羞ずべきなり。（『荘子』盗跖篇）

このように、『荘子』では、先秦の儒家系文献に見られない黄帝が筆頭となっている点に特色がある。次の天下篇にも同様に、黄帝、堯、舜、禹、湯、文、武という聖王の系譜が見られる。

黄帝に咸池有り、堯に大章有り、舜に大韶有り、禹

に大夏有り、湯に大濩有り、文王に辟雍の楽有り、武王周公は武を作れり。古の喪礼は、貴賤に儀有り、上下に等有り。天子は棺槨七重、諸侯は五重、大夫は三重、士は再重。今墨子独り生きて歌わず、死して服せず、桐棺三寸にして槨无く、以て法式と為す。（『荘子』天下篇）

以上、伝世文献における古聖王の記載を確認してみたが、「堯舜」「舜禹」「堯舜禹」「堯舜禹湯文武」という聖王の系譜が前提となった記述が圧倒的に多いことが分かる（注7）。では、やはり、『舉治王天下』のように、堯と禹とが直接の君臣関係に置かれ、問答をするという伝承は見られないのであろうか。そこで次に、近年発見された他の新出土文献について検討を進めてみよう。

四、新出土文献における古聖王伝承

まず郭店楚簡を取り上げる。一九九三年、湖北省荊門市郭店一号墓から出土し、一九九八年に『郭店楚墓竹簡』としてその全容が公開された郭店楚簡の中には、古聖王伝承に関わる資料がいくつか見られる。

天有り人有り、天人に分有り。天人の分を察すれば、行う所を知る。其の人有るも其の世亡（な）ければ、賢と雖も行われず、苟も其の世有れば、何の難きか之れ有らんや。舜は歴山に耕し、河の滸に陶拍するも、立ちて天子と為るは、堯に遇えばなり。（郭店楚簡『窮達以時』）

まず、この『窮達以時』は、『荀子』に先行する「天人の分」の思考が見られるものとして注目されているが、ここでは、舜が庶人から天子になれたのは、堯に遇ったからであると説かれている。人の窮達は「時」によるというのがその主旨であるが、ここには堯舜が君臣関係にあるものとして記述されている。

また、同じく郭店楚簡の『唐虞之道』では、聖王の禅譲が主題となっている。ここでは、堯から舜への禅譲は明記され高く評価される一方、舜から禹への禅譲には触れられず、禹についてはその治水事業が取り上げられるのみである。これは、禅譲を唯一の王位継承方法と考える『唐虞之道』独特の思考による。禅譲され、また禅譲した唯一の古聖王として舜を顕彰する一方、禅譲されながら、実子の啓に王位を世襲した禹には言及したくないという意図が働いているのである。

唐虞の道は、禅（ゆず）りて伝えず。堯舜の王たるや、天下を利して利とせざるなり。禅りて伝えざるは、聖の

盛んなるなり。（郭店楚簡『唐虞之道』）

次も同じく、『唐虞之道』であるが、ここでも、「愛親尊賢」という点で、「堯舜」が顕彰されている。

堯舜の行いは、親を愛し賢を尊ぶなり。（郭店楚簡『唐虞之道』）

もっとも、『唐虞之道』も禹を顕彰しない訳ではない。次の箇所では、舜の次に禹の治水事業を顕彰している。しかし、やはり舜から禹への禅譲については明確な言及がない。また、堯と禹との直接的関係も説かれていない。

親を愛し賢を尊ぶは、虞舜其の人なり。禹は水を治め、益は火を治め、后稷は土を治め、民を養うに足らしむるなり。（郭店楚簡『唐虞之道』）

そして、君臣関係が明記されるのは、やはり堯と舜である。以下の部分では、堯が舜を登用した理由を説明している。

古者、堯の舜を挙ぐるや、舜の孝なるを聞き、其の能く天下を養うを知ればなり。（郭店楚簡『唐虞之道』）

次に、郭店楚簡『緇衣』を取り上げよう。内容は、現行本『礼記』緇衣篇とほぼ同様であり、禹が登場する(注8)。それによれば、禹の治世は三年で完成したが、それは、もともと民に仁があったからではないという。ここでは、禹は単独で登場し、堯や舜との関係には触れられない。

子曰く、禹 立つこと三年にして、百姓仁を以て道びかるるも、豈に必ずしも仁を尽くさんや。（郭店楚簡『緇衣』）

次に、清華簡『良臣』を取り上げる。清華大学蔵戦国竹簡（略称「清華簡」）は、二〇一〇年に『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』として公開が始まったが、『良臣』はその第三分冊（二〇一二年十二月刊行）に収録された文献である。

堯の相は舜、舜に禹有り、禹に伯夷有り、益有り、史皇有り、咎囚有り。（清華簡『良臣』）

『良臣』は、黄帝から説き始め、春秋時代の諸侯に至るまで、その「良臣」を列挙するという興味深い文献であるが、ここでは、堯の宰相が舜、舜の臣下が禹、と明記されている。

また、銀雀山漢墓竹簡にも関係資料が見られる。銀雀山漢墓竹簡は一九七二年に発見された後、一九八五年に『銀雀山漢墓竹簡（壹）』が刊行されたが、続編の公開が滞っていた。そして、二〇一〇年に『銀雀山漢墓竹簡（貳）』が刊行され、その中に「論政論兵之類」としてまとめられた五十篇の古逸文献が含まれていた。その一篇

に「選卒」がある。

……禹は選卒万人を以て三苗に勝つ。湯は選卒七千人を以て桀を逐い、之が天下を奪う。武王は選卒虎賁三千人を以て牧の野に□、紂を殺し、之が天下を奪う。（『銀雀山漢墓竹簡（貳）』所収論政論兵之類「選卒」）

竹簡に残欠があり、禹の前にも類似の文があったかどうか未詳であるが、禹、湯、文、武の軍事行動が「選卒」（選抜した精鋭兵）による勝利であったことを説いている。

同じく『銀雀山漢墓竹簡（貳）』所収「論政論兵之類」の中に「君臣問答」がある。内容は、（一）堯與善卷・許由、（二）舜與牟成犅、（三）禹、の三節として整理されているが、竹簡の残欠が甚だしく釈読が困難である。但し、堯と善卷・許由との問答、舜と牟成犅との問答が記されていることは分かる。禹は誰との問答であるか不明である。

最後に、上博楚簡を取り上げる。まず、本稿で注目している第九分冊所収『舉治王天下』は五篇からなる文献であるが、その内の「文王訪之於尚父舉治」篇にも古聖王の名が見える。竹簡の接続に未詳の部分があるが、文王と太公望（尚父）の問答の中に、「舜」「四帝二王」「黄帝」「堯」「湯」の名が見える。王の系譜については未詳であり、「禹」の名は見えない。

同じく上博楚簡の第九分冊に収録されている『史蓋問於夫子』も注目される。竹簡の断裂が大きく、読み取りにくい部分が多いが、文中に「禹湯」の統治を規範とすべきことが説かれている。

次に、第二分冊所収の『容成氏』は、古代帝王「容成氏」から周の文王・武王に至るまでの王者の系譜を記しつつ、その王位継承のさまを論ずる文献である。ここでは、禅譲のみを王朝交代の理想として掲げていて、右の郭店楚簡『唐虞之道』と類似するが、『容成氏』は、堯舜禹だけではなく、容成氏から武王に至る中国の歴史全体を扱おうとする点に特色がある。そこに記述される堯舜禹自体の系譜は伝世文献とも合致する。堯は老衰により、舜に禅譲し、王位に就いた舜は、四人の賢人を登用する。その一人である禹は、司工に任ぜられ、治水事業を命じられる。その治水のさまは、『書経』禹貢に記述されるものとは異なるが、舜の下命によって禹が治水を敢行し、中国全土を治めたという大局には相違がない。そして、その業績と禹が賢人であることにより、舜が三顧の礼によって禹に禅譲したとされる(注9)。

また、同第二分冊所収の『子羔』にも、子羔と孔子の

問答の中に、「堯舜」と「三王」（禹・契・后稷）に関する記述が見える。「堯舜」部分では、禅譲に関する議論が見え、「三王」部分では、その父が卑しい身分であったにも関わらず天子となったことが話題とされている。前半の「堯舜」部分と後半の「三王」部分には強い連続性はないとされているが、ゆるやかな堯舜禹の系譜は確認できると言えよう(注10)。

このように、郭店楚簡、上博楚簡、清華簡、銀雀山漢墓竹簡等に記された古聖王の記述を検討してきたが、いずれも、先に確認した伝世文献における聖王の系譜と基本的には矛盾しないことが分かる。「堯舜」あるいは「堯舜禹」という古聖王の系譜がこれらの文献にもうかがえることが確認されたのである。

それでは、堯と禹の問答を記す上博楚簡『舉治王天下』は、やはり異色の伝承と考えられるのだろうか。

五、堯と禹

そこで、改めて伝世文献の中に、『舉治王天下』の伝承と類似するものはないか、精査してみよう。すると、右の諸伝承と異なり、堯と禹とが君臣関係に置かれ、あるいは組み合わされて顕彰される場合があることに気づかされるのである。まず『荘子』の例を検討してみる。

昔者、堯は叢・快（膾）・胥敖を攻め、禹は有扈を攻む。国は虚厲と為り、身は刑戮と為る。其の兵を用いて止まず、其の実を求めて已むこと无ければなり。是れ皆名実を求むる者なり。（『荘子』人間世篇）

この人間世篇では、聖王による挙兵の例として、堯と禹とが組み合わされており、舜の名は見えない。但し、ほぼ同文を引く斉物論篇では、「昔者、堯は舜に問いて曰く、我は宗膾骨敖を伐たんと欲す。南面して釈然たらず。其の故何ぞや。舜曰く、……」と堯舜の問答となっていて、禹は登場しない。同一文献の中の同様の故事において堯禹か堯舜かに揺れが生じているのであるが、ともかく堯禹の組み合わせが見られる用例である。

次は『荀子』の記述で、「堯禹」として顕彰するものである。

以て身を修め自ら強むれば、則ち名は堯禹に配し、通に時るに宜しく窮に処るにも利し。礼は信に是れなり。（『荀子』修身篇）

ここでは、礼によって身を修め努力すれば、堯や禹にも並ぶことができ、窮達いずれにも対応できると説く(注11)。

次も同じく「堯禹」として顕彰するものである。堯禹

も、先天的に備わっていた者ではなく、旧態を改め作為的努力を尽くした後に完成した者であると説いている（注12）。

堯禹なる者も、生まれながらにして具わる者に非ず。夫れ変故に起こり、脩為に成り、尽くすを待ちて而る後に備わる者なり。（『荀子』栄辱篇）

また、次も同じく「堯禹」として顕彰するものである。「学」によって人は向上し、「堯禹」にも並ぶことができると説く。

我賤よりして貴く、愚よりして智に、貧よりして富まんことを欲す。可ならんか。曰く、其れ唯だ学か。彼の学なる者は、之を行えば、曰ち士なり、焉を敦慕むれば、君子なり、之を知れば、聖人なり。上は聖人と為り、下は士君子と為るに、孰れか我を禁ぜんや。郷には混然たる涂の人なるに、俄かにして堯禹に並ぶ。豈に賤しきより貴きにあらざらんや。（『荀子』儒效篇）

同様に、「堯禹」を組み合わせて顕彰する例としては、更に次の用例が見られる。

此に物有り。居るときは則ち周静にして下きを致め、動くときは則ち高きを綦めて以て鉅（大）なり。円なる者は規に中り、方なる者は矩に中り、大なること天地にも参び、徳は堯禹より厚く、毫毛より精微にして、大寓（宇）に充盈す。（『荀子』賦篇）

天下の治まらざるは、孫卿の時に遇わざればなり。徳は堯禹の若くなるに、世之を知るもの少なし。（『荀子』堯問篇）

前者は、「雲」の賦の中で、雲の徳の厚さを「堯禹」に喩えるものであり、後者は荀子の徳の厚さを「堯禹」に喩えるものである。

このように『荀子』では、「堯禹」の顕彰が比較的多く見られるのであるが、先に検討した通り、「堯舜」や「堯舜禹湯」といった組み合わせで語られることも多く、決して統一されている訳ではない。そうした意味で、次の王霸篇の記述も注目される。

故に国を治むるに道有り、人主に職有り。……是くの若ければ則ち天下を一にして、名は堯禹にも配せん。（『荀子』王霸篇）

国を治める道（細々とした政務は小吏役人に任せること）と人主の職（有能な宰相を任用して群臣小役人たちを正道につかせること）を全うすれば、その名声は「堯禹」にも並ぶと説くものであるが、先に取り上げた同篇の「如是、則舜禹還至、王業還起、功壹天下、名配舜禹」では、類似の言い回しでありながら、当該箇所が「舜禹」となっている。これも、同一文献の中でやや揺

れのある例である。

更に、次の性悪篇では、同一章の中に「堯舜」と「堯禹」とが混在している。

凡そ人の性なる者は、堯舜（禹）の桀跖に与ける（お）も、其の性は一なり。君子の小人に与けるも、其の性は一なり。今将に礼儀積偽を以て人の性と為さんか。然らば則ち有た（ま）曷（なん）ぞ堯禹を貴ばん。曷ぞ君子を貴ばん。（『荀子』性悪篇）

「堯舜の桀跖に与けるも」の部分には問題が指摘されており、金谷治『荀子』は、諸本には「堯舜」とあるが、下文よりすれば、「堯禹」の誤写であるとして、改めている。いずれにしても、同一章の中で、堯舜なのか堯禹なのか、少し揺れのある例である。

儒家系以外の文献では、先に『荘子』をあげたが、それ以外にも、堯禹の組み合わせは次のように見える。まずは、『鶡冠子』の用例で、聖王の討伐の例として、堯と禹とをあげる。ここに舜は出てこない。

堯は有唐を伐ち、禹は有苗を服す。（『鶡冠子』世兵篇）

同じく、舜が登場せず、堯と禹とが組み合わせられるものとして、『韓非子』の用例がある。

堯の天下に王たるや、茅茨（ぼうじき）翦（せん）らず、采椽（さいてんけず）斲らず、糲（れい）粢（し）の食、藜藿（れいかく）の羹にして、冬日は麑裘（げいきゅう）、夏日は葛衣、監門の服養と雖も、此より虧けず。禹の天下に王たるや、身ずから耒臿（らいそう）を執りて以て民の先と為り、股（もも）に胈（はつ）無く、脛に毛を生ぜず、臣虜の労と雖も此より苦しからず。（『韓非子』五蠹篇）

ここでは、天子の位を譲ったというのは、せいぜい門番の暮らしをやめ下僕や奴隷の労働から逃れたというまでで、天下を人に与えたからといって賞賛するまでのことはないと説く。「天下に王」となりながら、質素な暮らしをしていた者の代表として堯と禹をあげる。

また、成立年代は未詳であるが、次の『世本』にも、堯が禹に直接下命している例が見える。

堯　禹をして宮室を作らしむ。（『世本』（孫馮翼集本）作篇）

更に、時代は下るが、『史記』にも「堯禹」の例が見える。

故に申子「天下を有つも而して恣睢せず、之を命づけて天下を以て桎梏と為すと曰う」と曰う者は、他無し。督責する能わずして、顧みて其の身を以て天下の民に労すること、堯禹然の若し。故に之を「桎梏」と謂うなり。（『史記』李斯列伝）

ここでは、天下のために身を尽くして労働した聖王と

して「堯禹」をあげる。

また、次の太史公言では、事業を成功させられなかった堯が、禹を得てはじめて天下が安寧になったと説く。

太史公曰く、……堯賢と雖も、事業を興して成らず、禹を得て九州寧らかなり。（『史記』匈奴列伝）

以上、伝世文献において「堯禹」の用例に注目してきたが、数は少ないながらも、確かにそうした用例は存在するのである。しかし、堯舜禹湯文武という聖王の系譜の印象が強すぎて、これまでその意味については充分に検討されてこなかった。また、舜がいるのになぜ舜を外して、堯禹という表現が成立するのかについても説得力のある説明がなかったように思われる。

こうした状況の中で、『舉治王天下』の発見は、古聖王伝承の研究に重要な示唆を与えるものと言えよう。『舉治王天下』では、堯と禹とが直接君臣関係に置かれ、しかも堯と禹とが具体的な問答を交わしているのである。右の伝世文献で、「堯禹」と記述する場合にも、両者の具体的な会話を記すものはなかった。しかし、仮に『舉治王天下』のような伝承が当時一定の認知を得ていたとすれば、「堯禹」という表現を使うことにも、それほどの違和感がなかったのではないかと推測されるのである。

また、『舉治王天下』がこのような伝承を記す背景として、禹の治水事業の鮮烈な印象があったと考えられる。もともとは神話かもしれないが、禹は天下の洪水を治め、中国の地理的基礎を確定したとされる。その禹が堯の直接の臣下とされたのも、故なきことではない。一方、舜も偉大な聖王として伝えられており、現に『舉治王天下』にも「舜王天下」篇が存在している。しかし、微賤な身から堯に見いだされて天子の位に就いた舜には、親孝行で有徳な王という性格はあっても、諸伝承からは、禹ほどの絶大な業績があったようには見受けられない。こうしたことも、堯と禹とを直接結びつける大きな要因になったと推測される。

結　語

伝世文献や近年出土の多くの出土文献においては、「堯舜禹湯文武」という聖王の系譜、あるいは「堯舜」、「舜禹」という君臣関係を前提とする記述が圧倒的に多く見られた。ただ、その一方で、舜を介在させずに、堯と禹とが君臣関係に置かれたり、組み合わされたりする場合もあった。

仮に、「堯舜」「堯舜禹」「堯舜禹湯文武」という系譜

を基にした記述を「堯舜」型の伝承と呼び、堯と禹とを直接組み合わせる伝承を「堯禹」型伝承と呼ぶことにすれば、本稿で検討した状況は、どのように整理されるであろうか。それは、古代において、「堯舜」型の伝承が有力でありながらも、同時に「堯禹」型の伝承も併存していたという可能性である(注13)。

そして、『舉治王天下』は、「堯禹」型の伝承が存在していたことを君臣問答によって具体的に示す貴重な資料であると思われる。恐らく、「堯舜禹」あるいは「堯舜禹湯文武」という聖王の系譜が整備される中で、「堯舜」型の伝承が有力になったと推測されるが、「堯禹」型伝承の痕跡として、伝世文献にも「堯禹」の顕彰や堯と禹との組み合わせ（つまり舜が出てこないもの）が見られたり、同一文献あるいは同一章の中で「堯舜」型と「堯禹」型の伝承が混在したりするのではないかと推測される。

これまでの神話研究でも指摘されるとおり、中国の古伝承は、かなりの合理化と整理を経て出来上がったものであり、「堯舜禹」あるいは「堯舜禹湯文武」という聖王の系譜が整備される以前には、より多様な型の伝承が併存していた可能性が考えられる(注14)。『舉治王天下』もそうした古伝承の存在を示すという意味で、極めて貴重な資料であると考えられる。

注

(1) 前者の例としては、『荀子』成相篇があり、後者の例としては、『銀雀山漢墓竹簡（貳）』所収「論政論兵之類」の選卒篇がある。それぞれ詳細については、後述する。

(2) 後述のように、郭店楚簡『緇衣』および『礼記』緇衣篇では「三年」とされている。

(3) 文脈は多少異なるが、堯舜に関する同様の言い回しが、憲問篇にも次のように見える。「子路 君子を問う。子曰く、「己を修めて以て敬す」。曰く、「斯の如きのみか」。曰く、「己を修めて以て人を安んず」。曰く、「斯の如きのみか」。曰く、「己を修めて以て百姓を安んず。己を修めて以て百姓を安んずるは、堯舜も其れ猶諸を病めり」」。

(4) 諸本はここを「禹舜」に作るが、時代順に合わない。金谷治『荀子』（岩波文庫）は、直後に「舜禹」とあるので、ここは誤倒であろうとする。

(5) 『孟子』に見える禹の治水事業との関係で注目されるのは、ここで「堯舜」の世のことを「禹・皐陶」は「見て之を知」っていたとする点である。

(6) 諸本、ここを「四帝兩王」に作るが、金谷治『荀子』は、

劉師培の説に従い、「両帝四王」に改める。なお、上博楚簡『舉治王天下』の「文王訪之於尚父舉治」篇には、「四帝二王」の呼称が見えるので、「四帝兩王」という表現についても一概には否定できないと思われるが、残念ながらその内訳については未詳である。

(7) このように古聖王を組み合わせて顕彰する以外にも、もちろん、単独で、あるいは王と（王以外の）他の人物とを組み合わせて顕彰するものも見られる。禹を単独で顕彰するものとしては、『論語』泰伯篇の「子曰く、「禹は吾間然とすること無し。飲食を菲くして、孝を鬼神に致し、衣服を悪しくして、美を黻冕に致し、宮室を卑くして、力を溝洫に尽くす。禹は吾間然とすること無し」がその代表であろう。

(8) 現行本『礼記』緇衣篇は、「子曰、禹立三年、百姓以仁遂焉、豈必盡仁」に作る。

(9) 『容成氏』の詳細については、曹峰・李承律『上海博物館蔵戦国楚竹書『昔者君老』『容成氏』（上）譯注』（上海博楚簡研究会編、二〇〇五年）、浅野裕一「『容成氏』における禅譲と放伐」（『竹簡が語る古代中国思想―上博楚簡研究―』（汲古書院、二〇〇五年）参照。

(10) この点の詳細については、福田哲之「上海博物館蔵戦国楚竹書『子羔』の再検討」（『中国研究集刊』第三十三号、二〇〇三年）参照。

(11) 諸本では、「自強、則名」を「自名則」に作り、「強」字がない。金谷治『荀子』は、『韓詩外伝』一の引用に「自強則名」とあるのを指摘して改める。

(12) 以下の「脩為」の語、諸本は「脩脩之為」に作るが、金谷治『荀子』は、兪樾の説（下文に「脩為」の語があり、また直前の「變故」と対応しているから）に従い、「脩之」の二字を削る。

(13) 但し、ここに言う「堯禹」型とは、決して、堯が禹に禅譲した、などということを意味するのではない。王位の継承関係とは別に、あくまで、堯と禹とが連称され、あるいは直接問答をかわす伝承という意味で仮に使用している。また、堯舜禹の年齢差がそれほどなく、堯の治世下において舜も禹も同時に臣下として存在していたと意識されていたのであれば、「堯舜」型も「堯禹」型も、矛盾はせず、大局においては大きな違いはないとも言える。この点については、すでに注（5）においてその可能性を指摘しているが、更に、『説苑』君道篇は、「當堯之時、舜爲司徒、契爲司馬、禹爲司空」と、堯の治世下に舜と禹とが臣下として存在していたことを明記しており、注目される。

(14) なお、従来の神話研究において、堯・舜・禹に関する考察は、その原初的形態の追究が主体となっている。禹についても、その原初的形態（例えば水神）や治水事業の意味および鯀と

の関係に注目が集まっており、堯と禹との関係について検討した研究は見られない。詳細については、森三樹三郎『支那古代神話』（大雅堂、一九四四年）、御手洗勝『古代中国の神々』（創文社、一九八四年）、白川静『神話と経典』（『白川静著作集』第六巻、平凡社、一九九九年。初出は一九七六年）、袁珂『中国古代神話』（みすず書房、伊藤敬一ほか訳、一九七一年新版）など参照。

【附記】本稿は、平成二十一年度～二十五年度、日本学術振興会科学研究費基盤研究B「戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究」（研究代表者、湯浅邦弘）による研究成果の一部である。